

---

# ジnkス

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジnkクス

### 【Nコード】

N3203R

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

何だかんだで長嶋茂雄のことを言うノムさんこと野村克也。その彼が言う最も凄かったジnkクスを乗り越えた選手とは。この二人は南海ホークスのN極とS極と言われていました。

## 第一章

ジnkクス

二年目のジnkクス、プロ野球ではよく言われることだ。

一年目いきなり活躍したルーキーは翌年は思つのように活躍できない。よく言われていることだ。

「まあそれは常識や」

このことについてはこの老将も言う。野村克也である。

「一年目の活躍で徹底的に研究されるさかいな」

その眼鏡の奥に鋭い目の光を見せながらの言葉だった。白い髪とその恰幅のいい皺のある顔ともあいまって実に知恵深い印象を見せている。

「それに一年目の活躍の疲れも出るさかいな」

「難しいんですね、そこは」

「どうにも」

「そういうこつちや。どんなルーキーでも人間や」

今度はこう言う野村だった。

「どうしてもそうなるわ」

「そうですね。やっぱり」

「どんなルーキーでも」

「一年目三割打ったとする」

その後についてだった。

「けれど問題はその翌年や」

「また三割打てるかどうか」

「そこが問題ですか」

「ピッチャーやと最初に二桁勝つ」

つまり十勝である。今はピッチャーがそれができるかどうかに関わっている。九勝と十勝では実に大きな差があるのである。

「けれど翌年や」

「できるとは限らない」  
「そうなんですね」  
「野球は一年草とも言っしな」  
野村は腕を組んで述べた。  
「翌年のことは誰にもわからん。特に選手個々のことはや」  
「難しい話ですね」  
「全くです」  
「優勝もですね」  
「そういうこつちゃ。二年目ほんまに活躍できたらや」  
そしてだった。野村は言った。  
「その選手はホンマモンやな」  
「じゃああれですね」  
ここで周りの一人が言った。  
「監督のお嫌いなあの人は」  
「つまりは」  
「あれはどうかしとるわ」  
野村はわざと口を尖らせて言うてみせた。本当にわざとである。  
「そもそもどういう頭の構造をしとるんや」  
「ミスターですからねえ」  
「あの人は」  
「まあ何ていいいますか」  
「あいつだけや」  
野村はそのわざと尖らせた口でさらに話していく。  
「わしの囁き戦術が通しんかったんわ」  
「王さんでしたっけ」  
「あの人も」  
「ワンちゃんはあれや。集中力が半端やなかった」  
そのせいだというのだ。その不動の精神力の前には小手先の手段では意味がないというのだった。それが王貞治なのだ。  
「けれどミスターはな」

「ですよねえ」

「ささやき耳に入っていましたっけ」

「あの人」

「入つとる訳ないやろ」

言い切つた。見事なまでに。

「あれが人の話を聞く男かい」

「それは何といたしますか」

「ええと、つまり」

「それは」

「聞く気がないんやない」

そうではないというのだ。

「聞く何かがないんや」

「ミスターですからねえ」

「その辺りは」

「本当に」

「そやから二年目のジnkクスもなかつた」

そうだったというのである。野村は今その目に過去を見ていた。

彼が現役時代、南海の四番キャッチャーだった時代の時である。

## 第二章

「そんなんはな」

「そういえば二年目も凄かったですよ」

「そんなもの何もなかったみたい」

「そういう感じでしたね」

「あれはなあ」

野村はさらにその顔を思い出ししていく。その長嶋が二年目のことをだ。

昭和三十四年の日本シリーズだった。野村のいる南海は絶対のエース杉浦忠の驚異的な活躍により優勝し巨人と対することになった。その大阪球場でのことだ。

野村はこの時一塁グラウンドにいた。そしてそこで隣にいる黒縁眼鏡の美男子と話していた。彼の背番号は二十一であった。

「なあスギ」

「何や？」

「あいつはどうする？」

丁度相手の巨人が練習をしていた。打席には長嶋茂雄がいる。

打撃投手が投げる球投げる球を次々と軽々とスタンドに放り込んでいる。まるで何ともないようだ。

その彼を見ながらだ。野村は話すのであった。

「あいつどうして抑える？」

「ああ、シゲのことか」

同じ大学の同級生同士である杉浦は長嶋を軽くこう呼んだ。

「あいつはな」

「ああ、どうするんや？」

「僕に任せてくれ」

「御前にかいな」

「このシリーズは絶対に勝つ」

杉浦は強い言葉で言った。

「南海が勝つんや」

「それは絶対にやな」

野村も杉浦の今の言葉にはそのまま頷いた。彼もまた、であった。

「南海はこれまで巨人にいつも負けたからな」

「ああ、二十年代な」

「ほんまいつも負けてた」

川上や与那嶺、千葉、そして何よりもその南海から強奪した別所によつてだった。巨人は黄金時代を迎えており南海はその巨人に常に敗れていたのである。このことは南海にとっては屈辱以外の何でもなかった。

それがわかつているからこそだ。野村も言うのだった。

「それで最近はなあ」

「西鉄に負け続けたからな」

「西鉄はほんまに強い」

野村は言った。そしてその強さの理由もだ。

「他の奴も凄いがサイさんはなあ」

「あの人やな」

「打てるものやない」

稲尾和久である。鉄腕と言われ絶対のエースとされている男だった。

「そうそうな」

「それで巨人を破つたんは西鉄やったな」

「三連覇な。けれどや」

野村はここで見た。杉浦をだ。

「今の南海には御前がある」

「僕がやねんな」

「御前はサイさんを超えるピッチャーになれるで」

「おいおい、それは持ち上げ過ぎやろ」

「いや、わしはボールを受けてるからわかる」

キャッチャーであることはそこまで大きいというのだった。

「御前は物凄い奴や。そやからな」

「このシリーズにも出られたし」

「それで巨人も倒せる。で、話を戻すで」

「ああ」

杉浦はその野村を見て頷いてだった。そうして応えたのだった。

野村もその杉浦を見てだ。彼にまた話した。

「長嶋、倒せるんやな」

「任せてくれ」

また言う杉浦だった。

「それでこのシリーズ、南海が勝つんや」

「わかった、じゃあ勝とうな」

こうしてだった。彼等はその長嶋、二年目のジंकクスなぞ全く縁のなかつた彼に向かうのだった。そうして第一試合は。

杉浦の好投で南海が勝った。その長嶋もだった。

「ほんまに抑えたな」

「ああ、やったで」

勝ってマウンドでだ。二人は笑顔で言い合っただった。

「シゲ、抑えたやろ」

「他の奴もな」

「僕は約束は絶対を守る」

この辺りも杉浦だった。彼はそうした男なのだ。

「そやから。シゲはな」

「御前が投げてる間は大丈夫やな」

「そう言うってくれるか」

「言うで、何度でもな」

野村は笑顔で応える。そのうえでキャッチャーマスクを頭の上にあげたその顔の笑顔をさらに明るくさせてだ。杉浦に話すのだった。

### 第三章

「長嶋は任せた」

「ああ」

「それでうちが勝つんや」

「日本一になるんや」

こう誓い合うのだった。そしてだった。

杉浦は何と四連投だった。次の試合もその次の試合もだった。投げ続けそのうえで勝っていきだった。最後の第四試合もだった。

勝った。見事完封を成し遂げそうして南海を日本一に導いたのである。

血マメがつぶれそれでも投げた。杉浦は偉業を成し遂げたのだ。

勝利を祝う宴の後でだ。野村は杉浦に話した。酒が飲めない彼は茶を手にしてそのうえでビールを楽しんでいる杉浦に話すのだった。

「長嶋は確かに凄いわ」

「ああ、凄かったな」

杉浦もだ。マウンドからこのことを実感していたのだ。

スイングを見て打つのを見てだ。彼はそれで言えたのだった。

「やっぱりシゲは凄いわ」

「けれど御前はその長嶋を抑えた」

野村はまた言った。

「その御前はや」

「僕は？」

「同じや。御前も長嶋と同じや」

「シゲと同じか」

「凄い奴や。二年目のジंकスなんて完全に打ち消してやったからな」

彼はこの年二年目だったのだ。長嶋と同期入団だからそうなる。

だがそれでもなのだった。彼はそれをものともせずだったのだ。

「よおやったわ」

「二年目のジंकウスか」

「わかったわ。それに苦しむ奴は確かにいる」

これもわかっていていた。見てきたから言えることだった。

「けれどや。それでもや」

「それでもかいな」

「そや、御前はそれを乗り越えた。長嶋と同じくな」

「それで同じなんやな」

「その御前は忘れられん」

温かい笑顔だった。その笑顔で話したのだった。

「絶対にな」

「そうか。有り難うな」

杉浦は野村のその言葉に微笑みになって返した。

「じゃあ。これからもな」

「ああ、頑張れや」

「そうさせてもらうな」

こう言い合ったのだった。昭和三十四年のことだ。

そのことを思い出してからだ。野村は言うのだった。

「長嶋も凄かったがスギも凄かったからな」

「あの人ですか」

「確かに凄い成績でしたよね」

「成績だけやわからん。見なわからんもんがある」

野村は周りにこう述べた。

「その目やないとな」

「よく言われますけれどね」

「そういうものなんですな」

「そや。まあ長嶋は確かに凄い」

何だかんだでそれは認める野村だった。若しかすると長嶋を好きなのかも知れない。野村はとかく憎まれ口を言ってしまう男だから

だ。

「けれどスギもや」

「凄かったんですね」

「それだけ」

「あいつのこと、ずっと覚えておいて欲しいわ」

野村は温かい微笑みと共に話した。

「皆な。それがわしの願いや」

「じゃあ監督はどうなんですか？」

「御自身は」

「わしは決まつとるやろ」

自分に話が向かうと大きく笑つてだった。

「わしは月見草や。しんみりとでええわ」

「いえいえ、目立つてますよ監督は」

「そうそう」

「実際に」

「それでもや。やっぱりスギや」

また彼のことを言うのだった。

「あれはほんまに凄かったからな」

「それでその杉浦さんをですね」

「何時までも」

「忘れんといて欲しいんや、長嶋は確かに凄かった」

またこのことを話した。

「けれどスギもや」

「同じだけ凄かった」

「それをですね」

「覚えておいてくれ。ええな」

「はい、わかりました」

「それは」

彼等も笑顔で頷く。そうしてなのだった。

彼等の中にも杉浦忠の名前とその実績が刻まれるのだった。野村

にとってそれは何よりも喜ぶべきことだった。満面の笑顔でその様  
子を見ているのが何よりの証である。

ジnkクス 完

2010・12・1

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3203r/>

---

ジnkス

2011年3月2日21時55分発行